

「教育実習記録」(実習日誌)について考える

特別支援教育実習担当 戸田竜也

1. なぜ記録するのか

教育実習を行う際には、毎日「教育実習記録」(以下、実習日誌)への記録が課せられる。実習生にとっては、1日の実習が終わってから自宅や宿舎で書かなければならず、たいへんな労力と時間を費やすものである。では、なぜこのような記録が必要であるのか。また、実習生にとってどのような意味をもつのか。ここでは、実習日誌に記録することの意味について考えてみたい。

(1) 1日を振り返り、翌日以降の目標や課題を明らかにする

実習日誌に記録することは、1つに、その日の実習内容や自身の行動を整理し、翌日以降の目標や課題を明らかにする役割がある。

教育実習は、実習校の時間割に沿って行われ、実習生にとっては慣れない環境のなかで、はじめて経験する事柄も多い。児童生徒在校中にその言動や自身の対応、その他生じた疑問などについて落ち着いて考え、考察していくことは至難の業である。そこで1日を終えた後、メモ等を用いながら、その日の出来事や自身の行動を振り返って「考え」、「書く」。そしてそれを「読み」、「再び考え」、「書き直す」といった一連の作業である実習日誌への「記録」が、実際の場面から距離を置いて客観的に見つめ直し、現場の忙しさのなかでは困難であった内容の理解や自身の評価・反省のために必要なのである。

このような一連の取り組みを通して、新しい発見や違った見方が可能となり、「次は～のように行動しよう」、「～を努力しよう」といった翌日以降の自らの振る舞いや目標・課題につながるのである。

(2) 実習担当教員へ報告し、指導・助言を求める

記録することの意味の2つめには、実習担当教員へ実習内容を報告し、指導・助言を受けることがある。これは、実習内容を自己完結させず、関係する教職員と共有・考察することによってより深い学びへと導くためのものである。1日の実習でどのような取り組みを行い、何を学んだのか。疑問に感じたことはなかったか。実習担当教員は、実習日誌の記録にもとづき、実習生に対して指導・助言を行う。実習日誌は、実習生と実習担当教員とのコミュニケーション方法の一つともいえるだろう。

以上のように、実習日誌への記録は、1日の実習から得られた学びの一つひとつを見落とさず、それをさらに深い学びへと導くとともに、以後の実習内容を充実させるために重要な役割を果たしているのである。

2.何をどのように記録するか

実習日誌は、毎日の実習終了後に記述し、翌日の朝に実習担当教員に提出することが基本である(なお、学校から別の指示がある場合には、それに従うこと)。記録する様式・項目は、あらかじめ大学によって設定されている。ここでは、実習日誌へ記録をする際に、何をどのように記録するのかについて考えてみたい。

(1) 事実に即して客観的に記述する

毎日記述する「考察・反省（実習生記入）」は、①実習目的及び実習内容、②児童生徒の動き、③教員の動き、④実習生の動きなどを振り返り、整理したものを記述する。

実習日誌は日記とは違い、その日にあった出来事を羅列し、感想を書くということでは不十分である。

1日にあったたくさんの出来事のなかから、a) どのような出来事（現象）があったのか、b) その場面で実習生はどのように考えたのか、c) 実習生はどのような対応をし、教員はどのような対応をしたのか、d) 児童生徒の反応はどうだったのか等を整理して記述する。その上で、e) この出来事・内容と自身の対応についての反省・考察をすることが求められるのである。

ここで大切なことは、a) b) c) d) については、事実に即して客観的に記述することに努め、実習日誌を書くなかで生じる「主観」とは明確に分けることである。実習生の思い込みが強く、「観察された事実」と「実習生の考え」を混同して記述している実習日誌も見受けられる。これでは、考察や自身の評価・反省が困難になるとともに、実習担当教員をはじめとする関係者に正確な状況を伝えることができなくなる。また、b) の実習生の考えについても、その場面を振り返り、そのときに考えていたことを正確かつ客観的に記述する必要がある。たとえ、あとから自らが考えたことの誤りに気づいたとしても、それを繕ってしまうのではなく、「その場で」なぜそのように考えたのか、そのような感情が生じたのかについて考察することが大切なのである。

(2) 仮説をもって考察する

e) の出来事・内容と自身の対応についての反省・考察については、先の a) b) c) d) をもとにすることは当然であるが、記述しようとする場面の前後の状況を把握し、それを資料として用いることが必要となる場合もある。たとえば、「生徒Aさんが生徒Bさんに対して〇〇〇〇と言った」という場面に遭遇し、それを考察しようとした場合、実習生が焦点をあてた場面から時系列的にさかのぼり、Aさん・Bさんの状況を把握することが大切である。焦点をあてた場面の前後には、彼らの行動（行動の理由となった内面）を理解するための事実があり、それらを検討することによって理解・解釈が深まったり、場合によっては修正されることがある。事実と主観を分けつつ、必要な情報は積極的に取り入れて考察することが、児童生徒の理解を深めるためには重要なのである。

なお、考察する際には「実習生の仮説」を持つことも大切である。仮説とは、資料や情報にもとづき、たとえば児童生徒の言動について「～のような理由があったのではないか」、「背景には～という思いがあったのではないか」と根拠ある仮定・想像をすることである。ある場面について、安易な結論を出すのではなく、また「わからない」と終わらせてしまうのではなく、実習生なりの仮説を立てて考察し、以後のさまざまな機会に児童生徒とのかかわりを通して検証するという作業を行ってほしい。また、実習担当教員等に質問をする際にも、わからないことを漠然と聞くよりは、自分なりの仮説・考察を踏まえて質問することが望ましい。

3. 記録をする際の留意事項

ここでは、記録をする際に留意しなければならないことについて考える。記録をする、あるいは文章を書く際に特に大切なことは、まず「読み手を想定すること」である。では、実習日誌の読み手とは誰なのか。また、どのような目的を持って実習日誌を読むのかについて考えてみよう。

(1) 読み手を想定して記述する

実習日誌の読み手として想定される者には、まず記録をする実習生自身がある。先にも述べたが、実習日誌に記録する・読むという行為を通して、実習内容への理解を深め、自身の課題が明確になっていく。また、実習日誌は実習終了後の振り返りの資料になるとともに、さらに一定期間を経てから読み返すことによって、実習中にはなかった新たな発見をすることもある。

次に想定される読み手は、実習担当教員である。実習日誌を通して、実習生の行動や考えを知り、指導・助言を行う。さらに、大学の教員なども読み手の一人である。実習日誌の記録をもとに、実習生の行動と実習内容を把握し、事後指導や評価に反映させる。概ね以上のような人々が読み手となり、それぞれが目的を持って実習日誌を読むのである。

実習生は、これらの読み手を想定した上で、実習日誌への記録をしなければならない。つまり、この記録を通して、複数の読み手のなかに特定の場面や実習生の行動、考えなどを具体的に再現させなければならないのである。

(2) 記録する内容の精選(取捨選択)

実習日誌に記録する際には、読み手の存在とその目的を踏まえた上で、どのような出来事・内容を記録するかについての検討が必要である。実習生としては、記録しておきたい事柄がたくさんあると思うが、記録できるスペースは限られており、内容の取捨選択しなければいけない。つまり、実習生が意図することを正確に、かつ決められた範囲のなかで記述することが求められるのである。

さらに、実習中に見聞した内容には「記録する≒文字として保存する」ことが適当ではない事柄もある。実習生にとっては、見聞した一つひとつが貴重な学びとなるが、特に、個人を特定した内容や児童生徒のプライバシーにかかわることについては、「記録する必要があるのか」について慎重な検討を求めたい。内容によっては、記録することの可否について、実習担当教員の判断を仰ぐ必要があるだろう。

(3) 適切な表現の検討

次に、記述しようとする内容をどのように表現するのかということに注意が必要である。たとえば、まったく同じ場面であっても、「教員はBさんを注意した」／「教員はBさんに『～をしてはいけません』と言った」／「教員はBさんにはたらきかけ、違うあそびに誘った」というように複数の表現ができるはずである。この少しの文章表現の違いによって、考察の仕方や読み手の理解する内容が変化し、場合によっては実習生の意図が伝わらずに誤解が生じることがある。実習生は、記録したい内容をどのように整理し、どのような言葉を用いて表現するのかについて、慎重に検討しなければならないのである。とりわけネガティブな表現については誤解が生じやすく、安易に記述すべきではない。

(4) 下書きをする

以上のことを踏まえるならば、実習日誌へ記録を行う際には、ノートやPC上などに下書きをする必要がある。例えば、一つの方法として、自分が書こうとする出来事・内容について、まず思いつまま素直に文字に起こしてみる。文章として成立せず、整理のつかないものもまず文字に表してみることが大切であり、キーワードを羅列することでも良いだろう。その後、それらを読み返して整理し、適切な表現を選んであてはめていく。言葉の表現についてはインターネットで「類語」を検索し、一度その幅を広げて

みるのも良いだろう。自分の意図していることと文字で表現したことは合致しているか、読み手に自分の意図が正確に伝わるか、この内容は記録する必要があるのかといったことを、「書く」・「読む」ことの繰り返しによって確認するのである。なお、下書きの際、自身の思いを素直に文字にすることによって、自らの視野の狭さや先入観、潜在化していた差別感や偏見などが現れてくることがある。つまり、下書きは自覚していなかった考えや行為に気づくことができる機会にもなる。それらを冷静に見つめ考えてみることを推奨する。

(5) メモをとる

最後に、実習中にメモをとることについて考えたい。メモは、実習日誌に記録する際に、1日を振り返る資料として有効である。しかし、実習中にメモをとることの可否については、実習校に確認する必要がある。また、メモをとることが許された場合においても、「どのような場面でメモをとるか」に留意する必要がある。

実習生がメモをとることで、本来行わなければならない事柄や児童生徒とのかかわりが疎かになってはいけない。また、授業中などに児童生徒から見えるところでメモをとると、なかには「自分に関する何が書かれたのか」と気にする者もいるはずである。

実習中は、自らが他者(児童生徒、教員)から見られていることを自覚し、メモをとる時間や場所について十分な配慮をしてほしい。

4.実習日誌の提出や管理についての注意

教育実習は、特別支援学校に通う児童生徒の日常生活に直接ふれるものである。児童生徒の生活のなかには、当然さまざまなプライバシーが存在し、実習生はこれらにもふれることになる。また、児童生徒についての理解を深めるため、個人データの閲覧を許されることがある。この内容は、一般の人々は目にするのでないものであり、また児童生徒にも知らされていないものが含まれている。実習生は、自身の学びのために、児童生徒の生活やプライバシーにふれることを許された「特別な存在」といえるだろう。そのような立場にある実習生が記述する実習日誌は、広く第三者に見せてはいけないものであり、適切な管理が求められる。

実習日誌の管理について、不特定多数の人々の目にふれてしまうようなところに「置き忘れる」といったことがないようにしなければならない。実習中は毎日実習日誌を持ち歩くことになるため、十分な注意が必要である。これは、学校内においても同様であり、特に実習担当教員へ実習日誌を提出する際に注意が必要である。「いつ」「どこで」「誰に」「どのような方法で」提出するのかについてしっかりと確認し、変更がある場合についても十分に対応できるようにしなければならない。

繰り返しになるが、実習生は守秘義務を遵守することを前提として、児童生徒の生活やプライバシーにふれることを許された特別な存在である。実習生の不手際によって児童生徒のプライバシーが漏れ、本人とその関係者を傷つけることがないように、また児童生徒や教員との信頼関係を崩すことのないよう、責任の自覚が求められるのである。

以上、実習日誌へ記録することについて考えることを述べた。これらを参考にしつつ、実習日誌への記録に真摯に向き合い、特別支援教育実習の学びを深めてほしい。